

様

小學指南

金

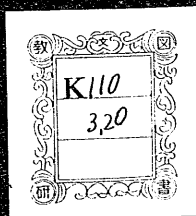
貳圓也

116

店內書

寶物展望社後援

金



A3
405



不規修二著

新撰小學指南

明治十七年
九月新刻

北澤藏版

小引 兼三郎

如雷居士有二男一女相追將及學齡女比
四歲試授百人一首忽誦數十首曰可教矣
因製紙牌以書國字一字一牌目擊手摩手
日以習熟乃教物名以摺綴之荆妻進曰
妾頃數學半法代為曰卿之不好訓誘初稚
無若婦女於是時々掛記以示其法家餘
積為小冊子存以俟他兒之用次日青黎閣

不規修二著

新小學指南

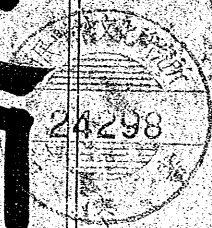
明治十七年
九月新刻

北澤藏版

小引

無三印

如電君士有二男一女相追將及學齡女比
四軍試授百人一首忽誦數十首曰可教矣
因製紙牌以書國字一字一牌目擊手摩
日以習熟乃教物名以括綴之荆妻進曰
妾向數學半法代為曰仰之不好訓誘初稚
無若婦也於是時々抄記以示其法軍餘
積為小冊子存以俟他兒之用次日青黎閣



主人未諒及此書主人切求上梓曰僕家出入
先生之門三世矣大父君磐水先生尊翁磐溪
先生著書俱藏刻板如實先生獨何憾之為
余笑而諾之今名小學指南夫教育為言在
教之育之与余常謂小學先育後教中學
教育必先大學必先教後育世之讀此書者
為知此意則於子之訓育之道思過半矣
甲申仲秋居士自識



新撰小學指南

小學ハ小兒ヲ教ふる學問也易き處より次第次第
ヲ難き方ニ移り赴く毎日常怠るく自然と上達せ
しむることを專一とす○先づ讀聲を教へ次ニ字樣を
教へ夫より物名を教へ其上にて字を書き物を數ふる
ことを教ふべし○小兒の精神を何れも染り易き者
なり譬へを一段の白布の如く此を黒くするも赤く
するも青くも黄くも好き次第自由自在と成る者
なり一度教ふる法を誤る時を其兒が一生涯竟
く消え去らざる色とある者あり恐るべし慎むべし

いろはにほへと ちりぬるをわか
 よたれるつねな らむうゑのねく
 やまけふこはて あさきゆめみー
 ゑひもせず

いへのいろは歌の字體を平假字と云ふ 字体の事ハ下の
 習字ノ處ニ云ふ
 べ

いろはの教方を一音つゞゐいろはにほへとと教ふべ
 いろはにほへとと始より連讀をさす可らむかくの
 如く七文字つゞ六遍教へ末のゑひもせずを五文字
 みて終るあり○總て訛なく一音つゞ判然と曰ふ口癖
 を付けおくべー○四十七字ども残らぬ讀み覺へー上
 を初より連けて讀まむべー但し聲を上げ下げして節
 を付けさす可らむ
 いろは歌も次の五十音圖も文部省出版の懸圖
 を用ゐ一字つゞ字指竹ふて教ふべー

アイウエオ

カキクケコ

サシスセソ

タチツテト

ナニヌ子ノ

ハヒフヘホ

マミムメモ

ヤイユエヨ

ラリルレロ

ワヰウヱヲ

夫の五十音圖ノ字體を片假字と云ふ但字体の事ハ上の平假字も同

五十音ゴジュオンを音の開合カイガフと聲の韻コエビョウキとを知らする者モノを又また横ヨコふも讀ヨクませ教ヲシへおくべし

アカサタナハマヤラワ

イキシチニヒミイリヰ

ウクスツヌフムユルウ

エケセテネヘメエレエ

オコソトノホモヨロヲ

音の開合ハ聲を出し時口の開合をいふありア行
 じてアイエの三音を開音と一ウオの二音を合音
 とカ行じてカキケを開音とクコを合音と他を
 こせも同トアイウエオの五音をありゆる音の親を
 せむれを母音といふ其他の四十五音を總て母音
 の韻を引く者あせむれを子音といふ故ゆゑの開
 合もアイエの三音の韻ある子音を開音とてウオの
 韻を合音あり○さて韻の上の如くアカサタナ
 ハマヤラワとア段を讀むときを總てアの韻を引く
 ありイキシチニのイ段をイの韻を引くウクスツヌ

のウ段ハウの韻を引く
 其の五十音の教方をアイウエオと教ふるはアイ
 を口を開く心にて呼むせうを閉る心にて云せエ
 を又開けオを又閉るありカ行もサ行もタ行もナ行
 もハマヤラワの五行を教ふるも同ト心得あり但
 ワ行のキエフの三音を其音の上のウの音を冠らせ
 てウを身を詰めて呼ぶが如く云なりむべしイエオ
 より重くして同ト音と聞えぬ様を教ふる時能く能
 く心懸くべし但ヤ行のイエとワ行のウとをア行の
 イウエと同音として差支あり○横に讀むと知ハ

ア、カ、サ、ア、タ、ア、ナ、アと一字つゞ少く引く氣味合ふ
教ふべしハマヤラワの五字も残らばアの韻を引る
せきより中までをイの韻を引うせウよりルまでを
ウの韻を引うすエの韻もオの韻も同様も教ふるを
り

六の五十音ハ行毎々音の出處あるありこれを餘り
高尙と思ふ様あせども教ふる者の含みまで其概
略を述べん

アイウエオ ヤイユエヨ ワヰウヱヲ
六の三行を喉音といひく喉の奥より正直に出で來

る音あり

カキクケコ サシスセソ

この二行を齒音あり但し力行を奥齒に障り力行ハ
前齒に觸る、あり

ハヒフヘホ マミムメモ

この二行を唇音あり但し八行を唇を軽く動かしマ
行を重く遣ふ

タチツテト ナニヌネノ ラリルレロ

この三行を舌音あり但しタ行を重くナ行を軽くラ
行を舌を轉しエ合ふ呼ぶべし○さてタ行のチツを

常ツネも多く齒音シオムを呼コべりあせを必オマシ舌ゼツをて呼コぶべし
濁音ダクオンのときハデジとジズと相混コノをせバあり
總スベテて小兒コエを大人オトナの口真似クチマネををる者モノあせバ教シふると
たぬ其心持ソノココロモチを含ませ置くべし自然シゼンと勞ラウせどて覺オホ
ふる者モノあり上カミの中ナカエヲと同オナドく只教タカシふる者モノの心得ココロエ
あるあり

ガギグゲゴ

ザジズゼゾ

ダヂヅデド

バビブベボ

あニシラの二十音ニシラオンを濁音ダクオンと云ふあニシラの濁音ダクオンを對タイて上カミの五十ゴジラ

音オンを清音セイオンと云ふ字ジの左サ媚ケハ雙點ソウテンを付ツけて此音コノオンの符フと
此言葉コノコトバの上ウヘハ清スむと濁ダクむとて大オホある相違サヘダヒあるとあ
り○さて濁ダクハ二種ニシュあり其一ソノヒトツハ持前モチマヘの濁音ダクオンをて譬タトヘハバ
カギ鑰カギクヅ屑クヅオヅ怕オゾシラズ不知シラズの如ゴトハあせハカキ押
クツ沓クツオツ落オツシラス令知メイチの言葉コトバとを全ソダく違チガふ者モノあり
又其一タノヒトツハ上ウヘよりの移ウツリりぬて濁ダクる者モノありイシバシ石橋イシハシ
タケザラ竹竿タケサの如ゴトハ若ニホト石イシの橋竹ハシタケの竿サといふときと
濁ダクらざるあしを見るべし

この濁音ダクオンをてハデジとシズと常ツネ々同ドウト様サマを呼コびて更サカ
ハ區別クベツあきガ如ゴトハこれ上カミハいへる齒音シオムと舌音ゼツオンとの心ココロ

得^エさへ随^{ツレ}ふを云^イひ分^ワつこと容易^{ツヤス}き者^{モノ}あり譬^{タト}へバ富^フ士^シの山^{ヤマ}と藤^{フジ}の花^{ハナ}との如^{ゴト}く富士^{フジ}をジあり藤^{フジ}をヂありさ
 せむ山^{ヤマ}の時^{トキ}ハ前^{マエ}齒^ハへ觸^フれて呼^ヨび花^{ハナ}の時^{トキ}ハ舌^{ゼツ}頭^{サキ}を上^ウ齒^ハ
 子^コ付^ツけて呼^ヨぶべし巴^ハ豆^ヅと舌^{ゼツ}を用^{モチ}る筈^{ハズ}ハ前^{マエ}齒^ハを合^アをべ
 し屑^{クズ}葛^カ氏^シ蛆^ス等の差^サ別^{ベツ}も舌^{ゼツ}と齒^ハとの用^{モチ}様^{サマ}は心^{ココロ}懸^ガくべし
 又^{マタ}半^{ハジメ}濁^{ダク}といふ者^{モノ}あり字^ジの左^サ肩^カに圈^{マル}を付^ツけて此^{コノ}音^{オン}の符^フ
 とす

パ。ピ。プ。ペ。ポ。

この音^{オン}を上^{カミ}よりの續^{ツグ}きゝて出^イづる音^{オン}ありをせも上^{カミ}の

音^{オン}ゆんとをぬるうツとつまるうの時^{トキ}のみなり即^{ソレ}ラッ
 パ喇^ハハジンピン人^{ヒト}品^{シヤウ}カムパク感^{カン}服^{フク}タンポ、蒲^{ハス}公^{コウ}の如^{ゴト}
 し但^タし西洋^{キヤウヤウ}の言^{ゴン}葉^{ヤフ}もツツプランプあどあるハ其^{ソノ}國^{クニ}の
 音^{オン}は持^{モチ}前^{マエ}の半^{ハジメ}濁^{ダク}音^{オン}あるあり
 又^{マタ}鼻^{ハナ}音^{オン}といふ者^{モノ}あり

ん

平假字

ン

片假字

ぬの音^{オン}を上^{カミ}の五十^{ゴジュウ}音^{オン}の外^{ホカ}にて鼻^{ハナ}は抜^ヌく者^{モノ}ありムと同^{ドウ}
 音^{オン}の如^{ゴト}く思^{オモ}ふ人^{ヒト}もあらんが自^{オノ}異^イありムを唇^{クハ}を閉^トぢて
 呼^ヨびンハ舌^{ゼツ}頭^{サキ}を上^{カミ}頭^{サキ}に付^ツけて呼^ヨぶあり

以上を清音濁音鼻音等の差別あるを詰る所を四
 十八音あり字ハ四十を加ふさまを懸圖を指して文字
 と音と違をざる様を教ふべし
 さて既ハ四十八音を覺へし上ニ二音を連ね合せてい
 ふことも教へおくべし此を四十六音ニ字を省く
 イウクの三音を下ニ添へて連け呼をするありとイウクの
 段ハ云ひ違へる
 むけきバ出さざ

アウ オウ カウ コウ
 サウ ソウ タウ トウ

ナウ ノウ ハウ ホウ
 マウ モウ ヤウ ヨウ
 ラウ ロウ ワウ ヲウ

この連聲の云ひ分ちを上ふいへる開音合音の差別さ
 へ慥ニ心得居らを決してアウとオウと又カウとコウ
 とゑど混ざるをありアカサタナハマヤラワの下はウ
 を連ね呼ぶ時ハ口を開きて云ひオコソトノホモヨロ
 ヲはウを合せたる時を唇を答めて云ふべし濁音のガ

ウゴウダウドウおどる同トエあり○又次の連聲も同
トく教へおくべし

エウ ケウ セウ

テウ ネウ ヘウ

メウ レウ エウ

夫の中ウキもエウを上カミのヤウヨウと混マシひ易ヤスく又ケウ以下
下の次タビの拗音アウイムと同トからぬ様ヤマふ云イひ分カつべし
この教方ヨシヘカタを懸圖カケヅのアの字ジを指サしてこの字ジの下タへウの

字ジを連ツけて讀ヨむ時トキを何ナニふと呼ヨぶぞと問トひアウと答コタふ
む其次ソノタビをオの字ジを指サしてウを付ツけて讀ヨむべしと命メイ
トオウと呼ヨびる初手シロテのアウと同ト聲コエある時トキハ違チガふと
云イひ聞キけ口クチを開アけてアウと云イひ唇クサバを答ツキめてオウと云イ
ふべしと教ヲシふ斯カくの如ノく悉ミツク開合カイガフあるとを覺オモへさすべ

○
拗音アウイムを二音ニオンの全ソダく相合ヒて一音イチオンとありたる者モノを云イふ
併シ上カミの五十音ゴジフオンの如ノく素直スナホに出イでせ少コトく力チカラを用モチゐ
るが如ノくある者モノありこの拗音アウイムは對タイして上カミの五十音ゴジフオンを

單音と云ふ

キヤ シヤ チャ ニヤ ヒヤ ミヤ リヤ

キュ シュ チュ ニュ ヒュ ミュ リュ

キヨ シヨ チヨ ニヨ ヒヨ ミヨ リヨ

よの拗音アウイムハ清音濁音キヨオムダクオムとも能く教へあぐべし○さてキヤ
とキヨとの全く異なる音オムあせども下シタはウを連ツグくる時トキハ
キヤウキョウ同音ドウオンの如く聞キコあるありあせも上カミの如く開合カイガツ
み因ヨりて差別レババツを云イひ分ワカつべきありキヤキヤキヤキヤキヤキヤ

開音カイオンありキョシヨチヨヒヨミヨリヨを合音カフオンあり○モシ左等サダあウ
を合アハせる時トキをキウシウチウと同オナくあせも一々云イチイチイひ分ワカ
つべき道理ダウリあせども古イミヘより中略音チュウリョクオンと唱ナゲへく同オナト音オンは
通用ツウヨウある者モノあり○又左サの音オンも上カミと同オナく拗音アウイムあり

クワ

この音オンをカと混マシひ易ヤスけせバ必カナラ二様ニヤウに呼ヨび分ワカつべし
上の拗音アウイムを下シタはウとクとを連ツグけ稀マレにをンを連ツグくるこ
とあせどもウを其他ソノホカふイを受ウケくるなり即クワウクワク
名ナイタンの四レ音オンあり又濁音ダクオンも教アガへあぐべし

この教方も懸圖が就きて教ふるあり但文部省出版の指教圖も
拗音あり別な又ウの字等を連け呼ぶることもある上
製造をべし
の法も同じ

以上の音を残らざ覺へるを左の數字を教ふべし

一ニ三五四五六七八九十百千万

この數字ハ左右の假字付せし如く兩様とも能く教へ
且イチとヒトツと同トニとフタツと同トと教へか
くべし○総て數字の事を下の算數の處に詳あり
と只其讀聲のミを覺へさせべし

○

上の教方にて能く覺へし上を懸圖を止め紙牌を取ら
せしよの紙牌の法を余が家の新工夫し他は類
なき教方あり
通常兒女の遊に用ゐる歌牌にて其面
みいろは四十八字加ふを一枚宛に書くの兩様を假字
にておの牌をいろはの順に並べ指して一枚づつ突
りおのいろはにほへしと繰返し繰返し教へ其後ハ牌
を一枚取り出して何といふ字ありと問ふいと答へろ
と答ふるに出来し上を紙牌を蒔き散し置き朝夕用ゆ
る器物を取り上げて其名を問ふべし譬へハ絲をを

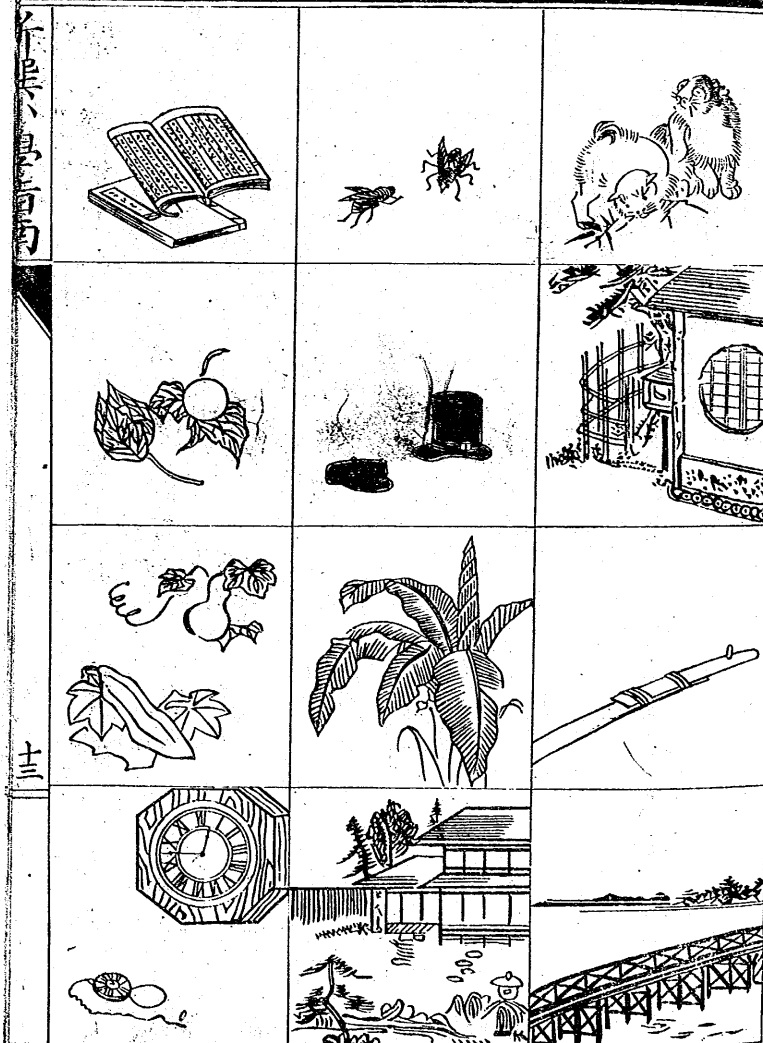
いとと答へさせ其上にて(い)の字と(と)の字との牌を取
らるべし(い)の牌を先ぬ取りて次ぬ(と)の牌を取るあり
二枚とも取り得む(と)更ぬ又針を出したりと答へさせ
其字の書きたる牌を前後はあらぬ様ぬ取らるるあり
既(い)二言の物名を取り覺へるに鉄硯又火箸の如く三
言を取らせ又尺算盤あど四言の者をも取らせべし
の牌ハ造るに及ばずヒハシノロバンの如き時ハを
濁るありとさへ云へば取らるる者ありさて牌の敷多き
を目を使ふと煩ふの紙牌を自由自在に取るに成らむ
拗音の牌も造りて茶碗障子あどぬ教へて取らせべし
拗音を一枚の面もちやと書くべし

この教方を能く覺へるに此方より品物を出さざれば
い(い)の字の頭み付く言葉をいふべしと云ひていぬ大い
し石いくつ幾箇いのち命あどと呼び擧げさせて其文
字の牌を取らるるあり(い)の牌一枚あるをバのぬを取り
其牌ハ元の如く單音拗音清音濁音あど取交せて種々様
々云えさせ取らせ前後の順序と言語の轉訛あき様
心を用ゐるべし

さてあの紙牌を差支るく自由自在に取らるる様あり
上(い)其物品の事實を少くづ、咄(い)聞け此の物を
斯様用あるあり此品を斯云ふ道は使ふありと其大

槩の譯柄を吞込せあくべ即ち左の順序を以て百餘種の品物を舉ぐ其中より斟酌してあまを教ふべ

下り列ぬる物品の訓解を思ひ出で儘を書き付けたる者あるを詳あり略あり一を擧げて百を漏らすの憂あること能わず覽ん人其心よく讀み給ふべ指教圖をいろは四十七音の中めて三十音七十二圖あり故に十七音ノニトヌルワヨレネを加へて百十二圖とせ且七文字ブを一組とて圖解を其後述ぶ末圖七五文字あり



い

犬も畜類の中にて才智あり殊に信義の厚き者あるを
 常々養ふる人忘れぬ闇夜と雖も足音をて其
 人を知る若しも異ありする足音ある時を怪みて吠
 わるあり故に古より犬守夜と云ひ傳へて今も夜中
 盜賊あるの用心に飼ひおくあり○西洋の犬ハ勇猛
 あして才智信義も勝れたり常々カメと呼ぶ英語
 きて来いと云ふ意あり我邦にてコハへ来いと呼ぶ
 る同くカムヒヤカムヒヤと犬を呼びしをカノヤ
 カメヤと聞き違へ竟にカメを洋犬の名目とせしあ
 り

はろ

家ハ人の住みて寒暑風雨を凌ぐ處あり通例に土臺を
 据ゑ其上に柱桁梁椽と段々組立て屋根を覆ふあり
 又四面ハ壁を塗り其外面を板葺くと其間ハ戸口及
 ひ窓等を設けて日光を引き出入り便する
 艫ハ舟を漕ぐ者にて櫂木にて作るあり
 橋を水上に架けて其上を往來すべき者あり通例ハ柱
 を立て、橋桁を弓状に亘り兩傍に欄干を設けて
 落し備ふ昔ハ土橋木橋ありしが近來に石橋錢橋等
 あり又釣橋とて下は柱を建てて上より釣り懸くる
 製造あり

蠅^{ハチ}も昆蟲^{コンチュウ}類^{ルイ}なりて兩羽^{リウウ}あり暑^{アツ}き時^{トキ}に出^イで、寒^{サム}き時^{トキ}も蟻^{アリ}も人家^{リョウカ}の中^{ナカ}に群^{グン}飛^ヒして食物^{シヨクモノ}の上^{ウエ}に集^{ツク}り逐^オへども又來^{マタ}る故^ユに人^{ヒト}は厭^{イハ}ひ嫌^{キヤ}むる、者^{モノ}あり金蠅^{キンバウ}馬蠅^{ババウ}猩^{キョウ}々^{キョウキョウ}蠅^{ハチ}等^{トウ}數種^{スウシュウ}あり

帽子^{バウシ}を頭^{カビラ}に冠^{カウ}りて寒暑^{カンショ}を防^{マカ}ぐ者^{モノ}あり頭^{カビラ}を腦髓^{ノウズイ}の在^アる處^{トコロ}を必^{カナラ}ず最^{モト}も大切^{タイセツ}なるべし故^ユに帽子^{バウシ}を戴^{イタ}きて外^{ホウ}より觸^フる者^{モノ}を遮^{ササ}るあり然^{シカ}し他人^{タニジン}は對^{タイ}する時^{トキ}ハ帽子^{バウシ}を脱^ヌぎて挨拶^{アイサツ}するを禮^{レイ}とせ○帽子^{バウシ}ハ羅紗^{ラシャ}天鵲^{テンジャク}絨^{ジョウ}又獸類^{ジュウリ}の毛皮^{ケダバ}を以^{モツ}てあせ造^{ツク}る又夏帽子^{ナツバウシ}も麦藁^{ムギワラ}細工^{サイコウ}或^ナハ藤^{フジ}細工^{サイコウ}鯨^{クジ}細工^{サイコウ}等の者^{モノ}あり

に

ほ

芭蕉^{ハチョウ}も其葉^{ソノハ}長大^{ナガダイ}なりて緑色^{キナンド}あり暖地^{ナグチ}の草^{クサ}にて夏^{ナツ}は花^{ハナ}開^サく沖繩^{オキナワ}島^{シマ}にて此^{コノ}纖維^{センイ}を採^トりて芭蕉布^{ハチョウフ}を織^{オリ}る二階^{ニカイ}も家^{イヘ}の二重^{ニヘ}なり重^{カサ}りたる者^{モノ}あり但^タし梁^{ハシ}下^{シタ}六尺^{ロクシキ}は元^{モト}たざる者^{モノ}ハ二階^{ニカイ}とハ云^イはず

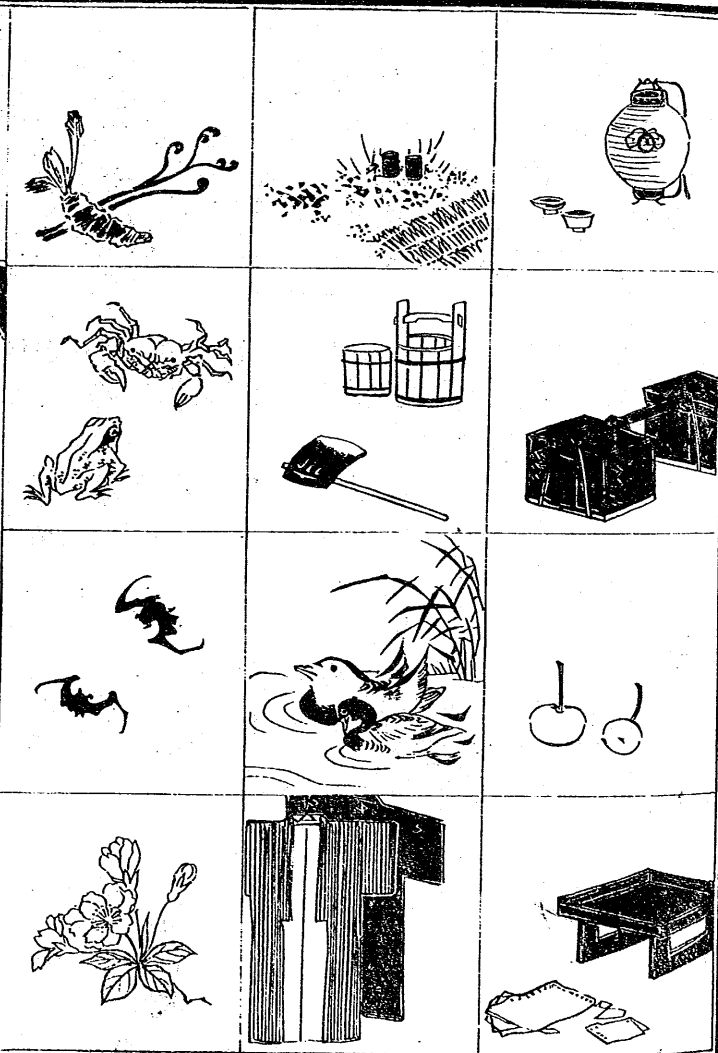
庭^{ニハ}を竹木^{チカボク}泉石^{センシキ}あどを植^{ウエ}ゑ列^{ツラ}ねて室前^{シツゼン}の景色^{ケキ}を添^ソふる處^{トコロ}を云^イふ又家^{イヘ}の中^{ナカ}にて入口^{イログチ}あどの土間^{トマ}をも云^イふ本^{ホン}も物事^{モノゴト}を書^カき載^ノせたる書物^{シヨモノ}の事^{コト}あり讀本^{ヨミホン}繪本^{エホン}書本^{カキホン}板本^{ハンボン}あど種々^{シュシュ}に呼^ヨべり

酸漿^{ホウジキ}も野草^{ヤサウ}にて圓^{マル}き實^ミを結^{ムス}ぶ始^{ハジ}ハ青^{アヲ}く後^{ノチ}も赤^{アカ}く女^メ兒^{コドモ}輩^{タビ}が瓢^{ヒョウ}を去^サりて其中^{ソノナカ}を空^{カラ}ゆゝ口^{コウ}中^{チュウ}に弄^{ロウ}して音^{オン}を

發せしむ故に頰突の稱あり

へ
 絲瓜瓢箬を共に蘇果類あり絲瓜を黃瓜白瓜より大なり其未熟ある時を食ふべし既ぬ熟せし後其液を取りて皮膚を潤ふを藥料とし又其網絲を晒して海綿と同じく物を洗ふの具とせべし○瓢箬を其實の中身縊せ上下兩腹とある其外皮頗堅厚るを瓢箬を去り乾りて酒を蓄ふる器とす

と
 時計を晝夜各十二時ふ分ちて一日を二十四時とす一時を六十分づつゝめて日中夜中の十二時を時の終るをむとせより一時までの間を零時又を初時と云ふ



ち

提灯チドウを夜中ヤナカ携カへ行く燈火トモあり細き竹輪タケワを骨組ホネグミ其上ソノウエ

紙カミを帖ハり油アブを引ヒく高張弓張タカカリユミ又ハ箱提灯ハコチドウ風落提灯フヲラチドウ

小田原提灯コダハラチドウあど種々の製セあり

猪口イソグチを飲シ食器シヤクキあして猪イソの口クチは似ニせを此名コナあり常ツネに

酒盃サカヅキを直ナ猪口イソグチといへども酒吞猪口サケニイソグチと云ふべし

兩掛リウカケを兩リウの箱ハコを棒ボウの兩端リウバンに架カけて前後ゼンゴに擔カぐべき者モノ

あり箱ハコを行カり行李リョウリあり葛籠ツツラあり多くを旅行リョウカの時トキは衣類イレイ

書物シヨモノあどを納イめて用モチふる者モノあり

林檎リンゴを木果ボクカにして梨ナシに似ニて少スく酸味サンミあり其形ソノカタチを圓マル

くして外皮ガイヒを緑色リョクシヨウ光ホリあり熟ジュクを食シむ其頭ソノカシラは紅色ベニイロを帶オ

り

ぬ

ぶ

塗膳ヌシデンを漆シヤクめて塗ヌりこる膳デンを云ふなり膳デンを食事シヤクジの時トキに

椀ワン皿鉢シヤクハチあどを載ノせ置オく臺ダイあり

糠袋ヌカフクロを米糠コメヌカを納イる浴具ヨクグあり糠汁ヌカジュを身體シントウを洗スへハ

膏垢コウカウを去サりて皮膚ヒフを光澤クワダクを生シぜり

坩壺コンコを金銀銅鉄キンギンドウテツあどを銘メイを時トキに用モチふる土器ドキあり烈火リョウカ

の中ナカにありて崩壊ホウカイせざる者モノあり

桶バケを木キにて造ツクり底ソコありて水ミヅを湛タふる器キあり花柏扁柏ハナヒキヒキ

を用モチゐて其外面ソノウミを竹籬タケシ或ハ銅鏡ドウキョウあどを籬シを懸カく手テ

桶炊バケイ桶擔バケタ桶等バケトウあり

を

る

斧ノコギリを木材キヤイを割ワり或ナを斫ツクる又物モノあり鋼鍊ハガネにて製ツクり木柄キヤイを付ツけておむを用モチゐる

鴻フナ鷺ササガを水鳥ミヅトリめて且渡鳥ワタトリあり雁鴨ガンカあどと同オナトク秋來アキキタり

春去ハルサる其形ソノカタを刀鬼コガキより大オホきく羽毛ウマ甚美麗ヒビあり頂イタタめ

青白色アヲシロの長毛ナガモめて舩枕フナカサの如ゴトき者モノありこむを劍羽ケンバと

云ふ但雌鳥メトリありハあハ此鳥コトリを雄雌相離オスメスせどハ水ミヅ上ウヘ

み遊び戯アソビる故ユヱに其美毛ミモを愛アイして池沼チヌに飼カふ者モノあり

○古イミヘより鴛鴦ウヰヤウヰと書カき來キタせど實物ジツブツあり當アタらぬとぞ

綿衣ワタエと綿ワタを入イれたる衣服イフクあり絹木綿ヌメモンの差別シヤビあく寒サムさを防マダぐ為タメに綿ワタを中ナカに敷シきて裁縫シタテたる者モノあり

わ

蕨山ワサビ葵アオイ共トモに野草ヤササあり蕨ワサビと芽出メデし少オホ延ノビびる莖クサを食物ショクモノ

とす山葵ワサビと根ネに辛味カラミあむを研スりて香料カウリとて其葉ソノハも

若カき時トキに塩漬シホヅケあハて食クふべハワサビと云ふ

蟹カニを甲殻類カウコクありて背腹セハラ共トモに堅カタき甲カを纏マふ左右各サイウ四脚シキョウ

其前マエに兩螯リウガウあり鉗ツグと云ふ其進退シンタイを横行コウコウありて頗オホ早ハヤ

大小數種オホコナありて常ツネに水中ミヅナカに穴居アナキヨる海産カイサンの者モノ其

肉ニクを食料シヨクリョウとて又山間サンカンの溪流ケイリキにある澤蟹サバガニ石蟹イシガニあり

食クふ可ベらむ

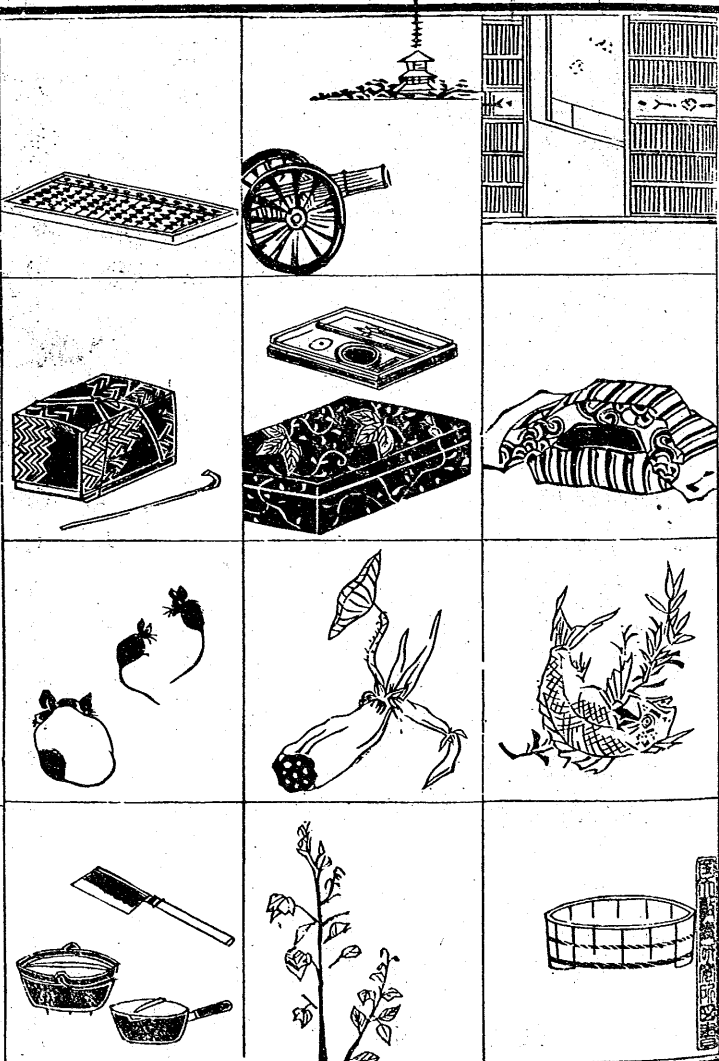
蛙カエルを爬蟲類ハチムシありて四脚シキョウあり卵生ロウセイありて其孵出フダシせし時トキ

を蚪コウと云ふ小魚コウギョの如ゴトく漸オシく長ナガくと脚生キョウハルし尾脱ビダツる

蟾蜍山蛙雨蛙等の種類頗多し其聲總て聒々者る
まゝ錦襖子のミ頗幽清の音あり

蝙蝠を獸類あして兩翅あり其形を鼠に似て聲も亦同
ト晝間を人家又ハ樹木の陰處を棲みて黄昏より飛
び出づ小笠原島ハ其翼の五六尺に亘る者あり人
も飛付て害をなせりと往々ありあまを野伏魔と
呼べり

海棠を荅の色濃紅あして開けを紅白相交るが如し梅
桃杏櫻と相並びて春花の艷色を爭ふ然れども古よ
り色ありて香ありと云ふ



よ

段戸を蘆幹を編みて紙代へたる障子あり暑き時
用ゐて風を透き通を爲あり

卧被を夜中身體小被ふ服あり通例を綿の薄き者を夜
着と云ひ厚き者を夜具といふ

た

鯛ハ淡紅色ありて背ハ鯉き鰭あり海魚中の上等品
て祝賀の饗饌ふを必用する者あり又甘鯛黒鯛等あ
り皆食料とすべし

蕃椒を元來熱國の草にて其實甚辛一文祿年中朝鮮征
伐の時始て其種を移し者あれバ唐芥子と云ふか
り實ハ初め青く後や赤く生熟共に食ふべし辛味

最烈き者あり

鹽を水に湛ふる者あり其製を桶小同ト正圓あり楕圓
ありて皆扁平あり其大なる者ハ馬鹽洗濯鹽と云ひ
小なる者ハ手水鹽と云ふ又銅鹽とて銅又真鍮をど
めて造りたる者あり

大砲を昔を石火矢或ハ大筒と唱ふる軍器あり銅製鐵
製の兩種あり此器を永祿中即ち今より三百年前ハ
南蠻國今ノ葡國より本邦に傳りたる者あり筒砲臼砲
等の製あり車に載せて野戦に用ゐる又軍艦砲臺に据
ゑ付けて寇敵に備ふる利器あり

塔ハ佛寺ハ建つる高閣にして二重三重五重等あり毎層必屋廡を設く其大なる者十丈の高き及び小なる者ハ一二寸に過ぎば木造銅造又漆器陶器の者あり

料紙箱を平日用料の紙即ち半紙美濃紙又巻紙封筒をどを納む置く箱あり通例の品を冠蓋めて中々懸匣あり木地蒔繪青貝等各種の製あり必同製の硯箱と相連續する者あり略して料紙硯と呼べり蓮根ハ蓮の根なり蓮を水草にて夏時花開く其根を節ありて中ハ數條の空洞を通じ煮て食ふべし

れ

ろ

蕎麥を穀物にて夏蕎麥秋蕎麥の兩種あり其花を白其實を三稜の岨ちたをソバムギと云ふことを紛末にして煉り或ハ麵を製して食料とす筭盤を物を數る器あり其珠を六箇あり上の一箇を五珠と云ふ一にて五を用ふるあり下の五箇を一箇各一あり故に上下合せて十とあるあり一十百千萬と一桁づゝ、六位とある者あり

葛籠ハ衣類書物などを納む貯へおく器あり通例を薄き竹を組みて箱を作り内外共紙にて帖り其上に柳蒚或ハ生漆を塗る必二箇ありて相合ふを蓋

つ

と呼び身と呼ぶ

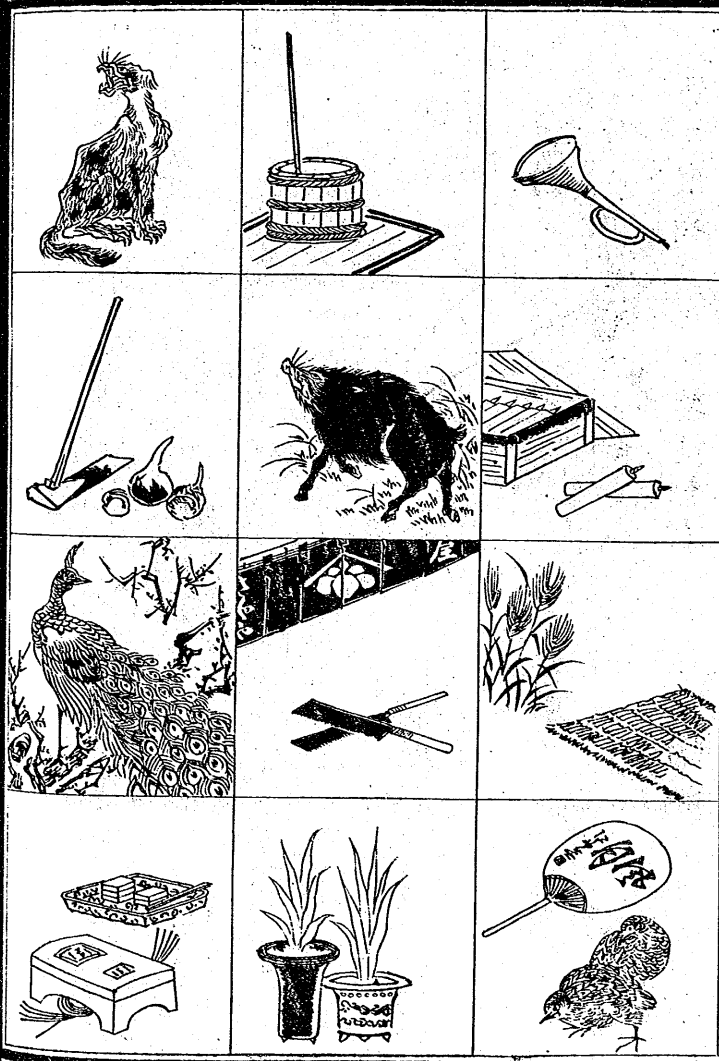
杖を歩行を助くる者ありて老人又は足弱の者が蹶り
ざる為に携へ突く通例を竹木等にて長さ二尺五六
寸斗ふ製を又夜行旅行の用心に鋏製をも用ゐる
猫鼠共の獸類あり人家に棲みて鼠を座鋪納戸臺所等
の差別ある夜中に出で食物を求め衣類
書物を喰ひ戸障子あど嚙み破りて甚く害をあた
者ありこれを防ぐにハ猫を若く者あり故に人家多
くは飼ひ養ひて其害を備ふ猫は柔和ある性質を
とも利爪ありて怒る時ハ搔き傷く寒を畏れて暖氣

ね

を欲せしこと殊に甚し

鍋を物を煮る器あり鉄製を鉄鍋と云ひ銅製を銅鍋と
云ひ陶器を土鍋と云ふ其他に青銅真鍮の製あり其
形を數種あり釣を懸くる者あり柄を付くる者あ
り人家日用の要器にて汁羹あどを作り蔬菜肉類を
煮るに用ゐる又製藥煉金の用も充つ○平日の飲食
調理もに鉄鍋土鍋を用ゐるべし銅青銅真鍮を毒か
り若しおしを用ゐる時ハ必白鐵を引くべし
鈍を竹木等を割る刃物あり斧と同一くして小き水
柄を付けて片手でも容易く使ふべき者あり

な



ら

喇叭^{ラッパ}を樂器^{ガクキ}あり其音^{ソノネ}の大^{ダイ}おしく遠く響き亘る者^{モノ}を
を軍中^{グンチュウ}號令^{ガウレイ}を傳ふる用^{ヨウ}を充つ其製^{ソノセイ}を銅管^{ドウカン}ふて口^{クチ}よ

り氣息^{イキ}を吹き込む時^{トキ}を忽音響^{トクナキウ}を發^{ハツ}せ
蠟燭^{ラッソク}を火^ヒを點^{トモ}して燈火^{トウカ}の用^{ヨウ}をなす者^{モノ}あり蠟^{ラッ}を水蠟樹^{スイラックス}
を生^ナむる蟲^{ムシ}の巢^スを採^ヒりて油^{アブ}を製^{セイ}せ然^{シカ}ども今^{イマ}ハ多^タ
く榛^{セン}より蠟^{ラッ}を製^{セイ}せり又魚膏^{イサカウ}を用^{モチ}ふる者^{モノ}あせど下品^{ゲヒン}
に属^{ゾク}せ

む

麥^{ムギ}を穀物^{コクモノ}の一^{イチ}にして大麥^{オホムギ}小麥^{コムギ}の兩種^{リウシュ}あり冬の初^{ハツ}種^{タネ}
を蒔^マきて夏の末^{マツ}に實熟^{ミヤジク}を大麥^{オホムギ}を米^{コメ}と同^{ドウ}く飯^イを炊^カ
きて食料^{シヤクリョウ}と一^{イチ}小麥^{コムギ}を粉^{コナ}末^{マツ}として温飽^{ウンボ}麵包^{パン}及び煎餅^{センベイ}

饅頭等を製するに用ゐる故に温飽粉の稱あり

庭に稻藁を織りたる敷物あり敷物菓物又魚類などを

乾くをみ用ゐる又荷物酒樽等を包む料とす

團扇を風を出さしむる器あり通例を竹にて造り其本

を柄とし其末を細く割りて骨とて骨を開きて兩面

を紙を帖る圓形あり卵形あり熱き日に扇ぎて風を

求め又蠅蚊などを逐ひ拂ふ

鶏と雞の属ゆゑ蹴合鳥あり頭小さく尾短く腹肥大

にして全身茶褐色あり原野に棲む者あると其聲の

愛を可きもの因りて籠め飼ひ養ふ者多し

ろ

井ハ常は井戸と呼ぶ穴を掘りて地下の水を汲む處を

り通例を井筒を埋めて水を湛へ釣瓶にて汲み取る

猪を野獸として其形を豚の如く口は雙牙あり田圃に

出で、大に作物の害をなす者あり其肉を頗美味し

して獸肉の最上とをへ

布簾を布幕にて簾の如く軒端に垂を懸くる者あり多

くは商家の店先を用ゐて其家の屋簷などを記しお

く者とし

鋸を竹木又を石等を挽き切る刃物あり綱鋸を平らに

延べて薄き板の如くし其一邊は凹凸の齒を設く工

ね

作上の最必用ある者あり

萬年青ハ元來沖繩群島ある先島の於茂登岳より出づ

る蘭あり故ゆオモトと呼ぶ其葉を綠色にして四時

枯せを實を赤き圓類ゆて必數箇相簇る又斑葉の者

あり其他奇種異品常々多けを盆栽として愛玩の

一物とす

狼を犬の類にして山野に棲む猛獸あり人畜に害を與

へて最恐るべし

鋏を土を掘る農具あり其刃を鍊にて製し木柄を付く

田畠を耕し樹木を植うる時あま用ゐる

く

慈姑を水草あり其葉を箭頭狀と稱して莖端に三稜の

緑葉を生じ其根を芋の如くして圓く煮て食料と

して淡泊無味の者あり

孔雀を雉の類にして其形大なり全身極めて美麗ある羽毛

ふして其尾長く端に寶珠の如き者あり元來熱國の

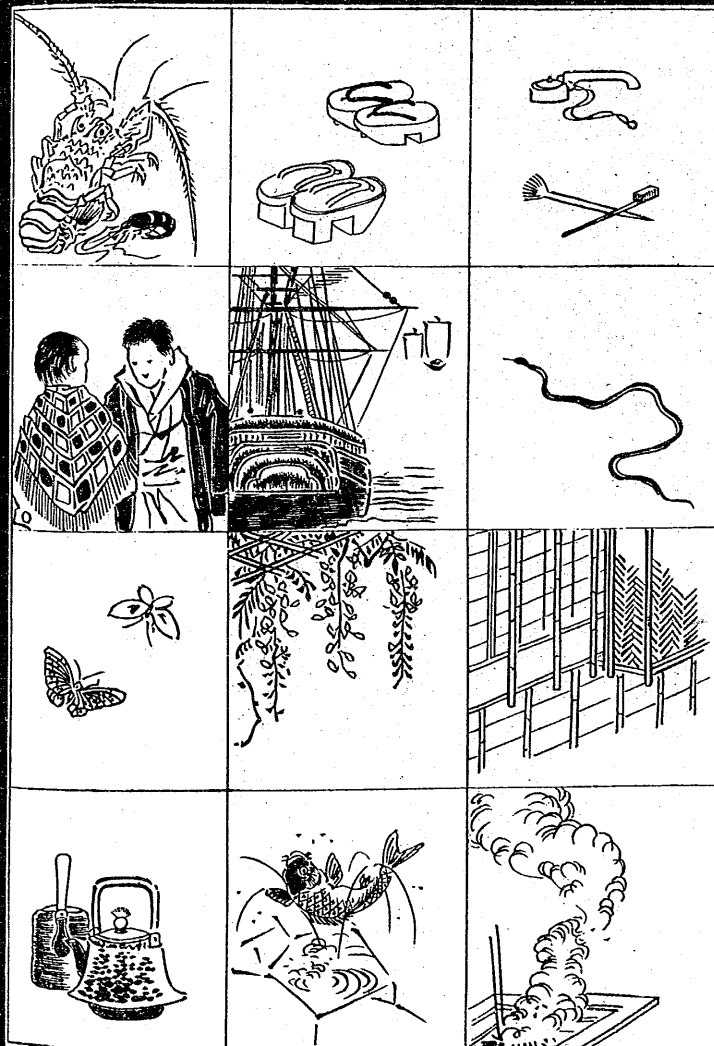
産み出ども久しく傳へ來りてお世を養ふ

菓子元來果物を用ゐるからん今の製を粳米糯米小

麥等の粉を基として砂糖或は餡を加ふ干菓子蒸菓子

子の兩種あり蒸菓子を多く餡を用ゐる餡ハ通例小

豆を煮て其澱粉を砂糖と共に再び煮詰めて者あり



や

墨斗ヤタテを携カ帶タイぬ便ビある筆ヒツ墨ボク筒トウあり銅製木製等あり端ハシぬ墨壺スミツバありて墨汁ボクジツを貯ツケへ其柄エを穿ウちて筆ヒツを納イサむこを腰間エウカンぬ挿サシて何地ナニチへも持ち行くべし

楊枝ヤウジを齒ハを磨ミカく者モノあり楊材ヤウサイにて製ツクる此名コナあり灌木コノボク楊枝總ヤウジソウ楊枝等あり近世キンセイと西洋形セウヤウガタの刷毛ハケ楊枝ヤウジを用モトるも又小楊枝コヤウジと呼ヨびて齒間レハカンの汚物ヲガクを剔ホり去サる者あり

おまハ黒文字クロモジと呼ヨぶ水ミヅを削カりたる小串コグシあり

蝎エビと蛇ヘビの類ルイありて恐オソるべき毒蟲ドクムシあり野原ノハラの濕地レツチに棲スむ其色ソイロを茶褐色チャイロありて黒斑コクバン朱點シュテンありどある者モノあり通例ツウレイの蛇ヘビと人ヒトを見て逃ニ去サれども蝎エビを去サらざ嚙カみ付ツり

ま

んとせし勢あり山行野行ハ心を用ゐるべし

窓と間戸ありて壁間ハ戸を設くるの謂あり日光を引き

或は眺望の爲めは作せる處より出入口ありあらば

烟を火を焚く時ハ生ぜる燄あり総て火燄を炭素とい

ふ毒氣を含みて人身ハ害ある者あるは呼吸せざる

様ハ心懸くべし

下駄ハ木履あり通例ハ桐材を以て造り下駄の中央を

剝り取りて前後を齒とし又竹皮を細く編みたる疊

表を其上面に付く是を疊付又ハ表付とも呼べり

船ハ水上に泛べて人或は器物を運送する者あり蒸氣

船帆前船あり大なる者ハ軍艦親船等ありて小なる

者ハ傳間荷足及び屋根船網船等あり通例ハ總て木

造る也ども大船ハ鐵造の者あり蒸氣及び帆を用

ゐざる者ハ櫓槳竿を用ゐて押し進まむ

葡萄ハ蔓草ありて其實ハ藥物中の上品あり秋中ハ實

熟し紫色の圓顆あり粒々相簇りて下垂せるハ一房

二房と呼ぶ其味最甘美あり培養の植物にて架を作

りて其蔓を伸ばしむ又野生の者ハ其實頗る小なり

醸して葡萄酒を製造す

鯉ハ河魚中の上品ありて饗應の饌に用ゐらるゝと

鰯の如く其體長くして肥え眼圓くして鱗の並能く
整ひたり川湖や産し又沼池や養ふべし緋鯉と唱ふ
る者あまたをさし對して真鯉と云ふ緋鯉を全身赤
色の者を通例とせ又白色斑色の者あり共し食ふ可
らむ

氷を水の寒氣の爲に凝り固りたる者あり故に寒中
求むべきも暖熱の候にハ得るを能はざりし近來
北海の箱館に製氷場を設けて氷塊を氷室に貯ふ
さば炎暑の時も寒冷を招くを云ふまでも
く熱病等の療治に於て一年四時其用を缺りど

江

蝦を蟹の類にして常は海老と書く頭も長鬚あり兩
腹も多足あり全身堅き甲を纏ひて腰以下ハ伸屈す
べし赤黒色ありて海老色と云ふ即ち是あり種類頗
多して皆食ふべし龍蝦ハ伊勢志摩及び相模の海に
多く獲るハ伊勢蝦鎌倉蝦の稱ありて其味殊に美
なり又車蝦芝蝦と呼ぶ者ハ内海の産にして手長蝦藻
蝦等ハ川蝦と呼べり共し其甲ハ軟くあり其極て微
小なる者を糠蝦といふ

襟巻を頸に纏ひて喉部の空氣を觸るゝを防ぐ者あり
古ハ老人或ハ僧侶のみ用ゐるが近世に上下老幼共

蝶テフを常ツネ

花香カウ

鍍瓶

尤人



あ

鰯アサギを海魚カイイキョにて食ふべし其形ハ鯖サバに似て體タマの左右サイウは一
 條スジの鰻ウナギに鱗ウロコあり鰓サイカ下より尾ビに至る是を前後ゼンゴと云ふ
 牽牛花アサガハを蔓草ツルナギとして七八月の頃コト毎朝コノアサ花開く故に朝顔アサガハ
 の稱あり五瓣ゴパンあるまじき相連りて漏斗ロウト状をあらせり紅ベニ
 白紺紫等の數色あり
 扇アビを開閉カイヘイすべき團扇ウチハあり通例ツウレイを竹タケを削りて骨ホネとあり
 其一端ソノイタタチを要カンを貫ススきてあをを統スぶ一端イタタチを紙カミを疊カミめて
 兩面モトモトに帖ハりあをを開ヒラけを風カゼを招マネき火ヒを熾オコす等の用
 をあはせ
 鸚鵡アザマを熱國ネツコクの産サンある杜鵑ホトギスと同ドウく足アジは兩距リョウキョウあるのみ

さ

故ユエに樹枝ジュシを攀ヨぢ上りて地上チノウに居イらば冠カ冠毛マ上カミは簪サシえ
 て巨嘴キョウシ下シタの曲マカる此鳥コノトリハ能ヨリく人語ジンゴを習ナラひてこゑを唱ナ
 る者モノあるをバ常ツネに養イクひて愛玩アイガンの具グとせ
 猿サルを山ヤマ獸ビとして四肢シシ皆手テあり獸類ジュウレイ中ナカに智覺チカクの最勝イトスガを
 たる者モノあるれば養イクひて技藝ギゲイを教シナふべし

き

草子ササシを紙カミを綴トぢて文字モジを書カき記シルシを書冊ショサツあり通例ツウレイハ手
 習オモヒ草子ササシとして習字用シラジヨウの者モノを草子ササシと呼ヨべり
 鏡臺キョウダイを鏡カミを建タつる臺ダイあり臺ダイに抽斗キウツを設セツけて櫛簪シカザシ并ナ
 膏油アブラ紅粉ベニオシロイあとの粧具サウグを貯タケふ
 急須キヤスハ小コさき茶瓶チャビンあり提鉤テツクあるくく柄エを付ツく通例ツウレイハ

陶器をせども玉石或は銅錫を以て製する者あり
巾着ハ錢或は守札を納めて腰に垂ぐる者あり錦
純子羅紗天鵲絨を以て造る多く小兒に帶むる
る者あり又皮革を以て造る

金魚ハ美麗なる小魚あり背鰭の有無に因りて兩種あり
背鰭のあるは和琉金あり其あき者を金鰻と云ふ
俗に九子と呼ぶ者はあり常に盆池に養ひて愛玩
する供を此魚を二百六十年前より支那國より渡り來
りし者あるが今も諸國に繁生し奇品異種の者頗多

菌を木の子あり林樹の下に生じ松茸推茸初茸香茸
及び木茸岩茸等種類甚多然れども元來陰濕の地に
生ずる者ありて毒物多し併し松茸推茸の兩品は香
味共み美しうて食料中の上等に属せり

瓢花ハ牽牛花の如くありて毎夕花開く故に夕顔の稱
あり實を瓢蓴と名づく其肉を薄く剥きて
乾かしたる者を干瓢といふ

柚子ハ木果なり其形を圓くして黄色あり外皮頗厚
瓢を袋に包みせて數箇相合ふ其狀ハ菊花の如く常
に香氣を賞して食ふべし

め

繡眼兒シロハシを唱禽ウタガモとして其色ソノイロを青鴉アヲカの如ノ常ツネは群グンをな

樹枝ジュシ上ノ集ツミりて同類ドウルイ互タガヒに相逼アイセマる俗ソクは目白メジロの押合オセアヒと

云ふ此鳥コトリの眼ガン瞼カンを圓マドく縫ヌイひたるが如ノ故ユヘに眼中ガンチウ殊モト

は白シロく見ミえを目白メジロの名ナあり

茗荷メイカを生薑ショウガの類ルイゆゑと葷草コンサウあり其莖ソノクキを食料シヨリョウと又根ネ

み傍カハラは筍タケノコの如ノき者モノを生ナむノウガノコといふ香氣カウキあ

りて食クラふ筈ハ此草コノクサの名ナをメがあるが訛オカりてメウガ

と呼ヨぶなり

み

水車ミヅグルを流水ナガシを用モトて車クルマを運轉ウンテンせしむる者モノあり搗臼ツギウス挽

臼ウスを利ツねて通例ツウレイを米コメを精シげ麥アヲと粉コにする等トウの

の用ヨウを元ゲンつ又マタ土石ツチイシの類ルイを細粉サイコあし或イヘハ刀鋸タウキョを施ホシ

して水石ボツキを挽ヒキき切る等トウの業ノリも用モトめる

燭臺ショウダイを蠟燭ラウショクを建タつる臺ダイあり水製銅製スイセイドウセイ又マタ漆器シキ陶器ドウキも

あり通例ツウレイも其高ソノタカさ二尺餘ニシツヨあし一柱イツチウあり三脚サンキョウあり

又其小ソノセウおして持モち行ユクきまへき者モノを手燭テショクといふ

火斗ヒタウを炭火タンカを納イめて持モち運ハクびせる器ウツリあり又火搔ヒカキ火取ヒトリ

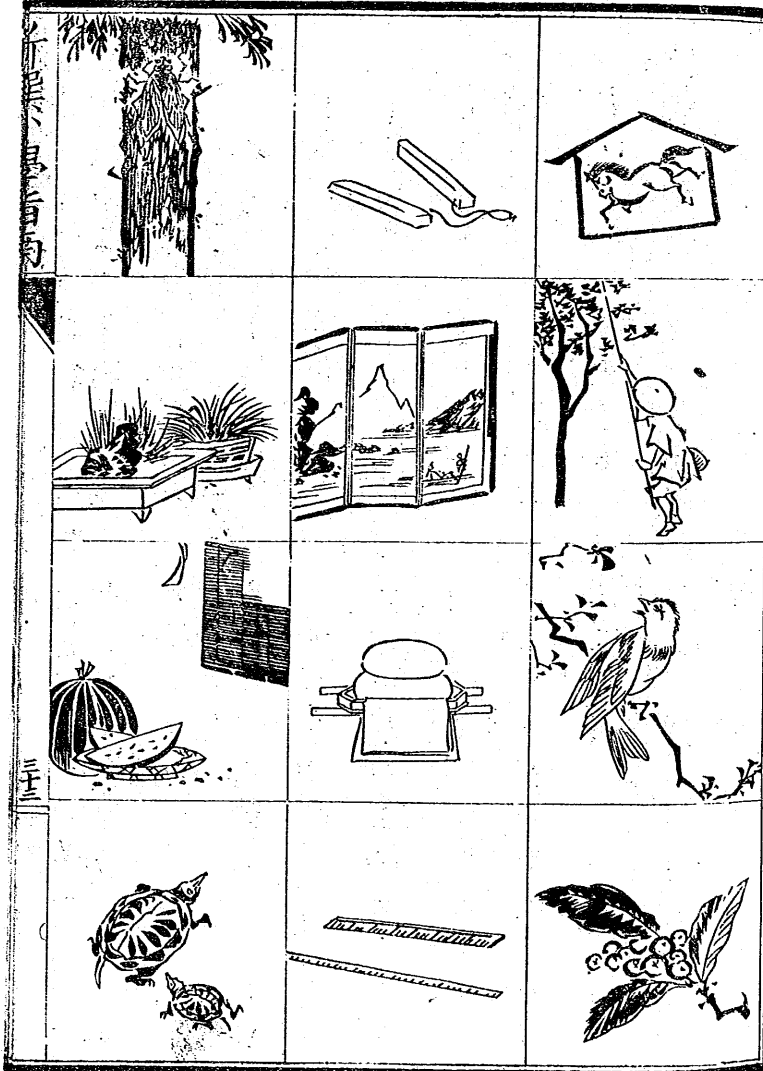
とも呼ヨぶ錢製センセイあり銅製ドウセイあり其柄ソノエを必水キスイを用モトる又下シタ

木板モクバンを付ツくる者モノあり臺火斗ダイヒタウといふ

將棋ショウギを左右相對サイウヘイタイして勝負ショウブを定サダむる戲器ギキあり盤バンを面メン

縱横ショウワウ各九カククあり八十一局ハチジュウイチクあり碁子キシを駒コマと呼ヨぶ主帥シュウシを

中央の居て玉將といひ金將銀將各二箇其左右の副
ふ桂馬香車も亦各二箇よて兩端の在り是を下列と
も飛車角行各一箇其上の居り歩兵九箇前列の備ふ
駒數二十箇左右合せ四十箇あり兩陣相闘ひて進
あり退あり虜を收めて我兵とて敵の主帥をうて進
處を失えしむるを勝とす
均藥を草本よて年々新芽を生ど其花を牡丹の如く
春末の開きて紅白等其色頗美艶あり
櫻欄を枝の喬木よて葉を幹頭よ叢生を茶色毛狀の
外皮あり採りて簾飾等を製し入絢ひて繩とす



息

繪馬と神社ハナヤに奉納ホウナツする額面ガクシあり古馬コウバを畫エき者モノあり

此名コノナあり今イマ種々シシエの繪様エヤあり

飼差エサレ鷹タカを養シヤふ為タメ其餌食エシキとある小鳥コトリを捕トラふる者モノあり

昔オホハ一つの職シヨク負ツクあり鶴ツルを長オホき竹竿タケザナの尖サキに塗ヌり付ツ

け雀スズナドリを目差メザシして捕トラふ故ユエ小餌差コエサレ又鳥差トリザレと云ふ

鶉ウズリを唱ウタへウタふウタて頭白カシラハクく尾長ビロハナ常ツネに數十羽スバハヒ相集アヒりて飛トビ

びビ廻マる

枇杷ヒバを山果サンクラふフて花ハナを冬月トウグツに開ヒラきて實ミを夏ナツに至いたりて

熟ジュクを黄色キイロふフて圓顆エンカクあり數顆スバハヒ相集アヒる王葡萄オウブドウの如ゴトシ

核大カネダイゆユて肉少ニクオウく其味ミ頗オホ甘アマ

拍子木ヒタキを檉材カシキを以もつて四角シカクに削ケり兩箇リウカ一對イツひヒて長オホき

も一尺イツシヤクゆ充ミたせ相擊アヒちて時トキを報ホウふ又多人オホタビ數スバハヒ小食コシキ事シ

を通知ツチする時トキあどオ用モチふる者モノあり元來ゲンライを樂器ガクキにて

笏拍子シヤクヒタキと云イひ管絃カンゲン合奏ガッソウの時トキ其節ソノマを拍ウつ者モノあり拍ヒタキ

子コを取トルるといふイフ是コレあり

屏風ビョウブを襖フスを連ツラねて持モち運ハコびヒき者モノあり其製ソノシヨを細ホソき

木キを組クみ骨ホネとト其兩面ソノリウメン紙カミを幾重イッヘも帖ハり詰ツめニ

枚相合ハシアイふ處トコロを蝶番テラサシといふ二枚折ニハシオリ六枚折ロクハシオリを通例ツウレイとす

室内シツナイに於オて風カゼを防フセき又見透ミトホレを遮サシる用ヨウと云イフ

餅モチを糯米モチコメを蒸ムしてこコを搗ツき固カタめたる者モノあり祭典サテシの

時^{トキ}を神前^{カミマタ}に供^{モツ}ふる者^{モノ}をソナヘモチと云ふ惣^{スベテ}て年首^{トシノハジメ}

佳節^{カセツ}等^{ナニ}もハ餅^{モチ}を搗^ツきておせを祝^{イハヒ}せり

尺^セを物^{モノ}の長短^{ナゲタビ}を差^サし量^{ハカ}る器^{ウツ}にて大小^{ダイコウ}兩種^{リウシュ}あり大尺^{タイセキ}を

布帛^{フハク}を量^{ハカ}る時^{トキ}のミヨ用^{モツ}るを兵服^{ヘイフク}尺^{セキ}といふ又小尺^{コセキ}

を惣^{スベテ}ての物^{モノ}に用^{モツ}るを曲尺^{カネガレ}といふ其^{ソノ}一尺^{イツセキ}を大尺^{タイセキ}

の八寸^{ハツサン}に當^{アタ}せり〇十厘^{ジュリシ}を一分^{イチブ}と十分^{ジュンブ}と一寸^{イツサン}と

十寸^{ジュサン}を一尺^{イツセキ}とし十尺^{ジュセキ}を一丈^{イチジョウ}と以上^{イジョウ}を十丈^{ジュジョウ}百丈^{ヒャクジョウ}千

丈^{チヤウ}文^{マン}といふ

蟬^{セミ}を兩翼^{リウヨク}六脚^{ロクキョウ}の蟲^{ムシ}にて春^{ハル}蟬^{セミ}夏^{ナツ}蟬^{セミ}等^{ナニ}數種^{スウシュ}あり秋^{アキ}に至^{いた}り

て其聲^{ソノコエ}の高^{タカ}く永^{なが}き者^{モノ}をツクツクボウシと云ふ又毎^{アイ}

す

簾^スを細^{ホソ}き竹^{タケ}又蘆^{アシ}の莖^{カギ}を編^アむたる者^{モノ}あり軒端^{ノキバ}に懸^カけて

日光^{ニツクウ}を遮^{ササ}る者^{モノ}をスダレといふ

西瓜^{スイカ}を蒺藋^{ケイコウ}あり其形^{ソノカタチ}圓^{マル}くして大^{ダイ}あり外皮^{クワイヒ}を緑色^{リョクシキ}にて

厚^{アツ}けせども瓢^{ヒョウ}を赤^{アカ}くして食^{クラ}ふべし炎暑^{エンショ}の時^{トキ}に熟^{ジュク}を

世^セを人^{ヒト}好^{コフ}みておせを食^{クラ}ふ

鼈^{カメ}を泥龜^{ドロカメ}とも團龜^{ドンカメ}とも云^イふ龜^{カメ}の類^{ルイ}に河^{カハ}中^{ナカ}又ハ湖^コ

沼^{シヅ}等^{ナニ}の産^{サン}を其肉^{ソノニク}を最美味^{モトモビ}あり甲^カの形^{カタチ}圓^{マル}けを西京^{サイキョウ}

大坂^{オオサカ}にてハ直^{ナタチ}なマルとのを呼^ヨべり

圖^ズは石菖^{イシショウ}ありて其解^カを脱^{ダシ}す請^{コト}ふ恕^{ジョ}也^ヤ

習字

字を書き習ふにむるを先づ筆の運を教ふべしとせ
 と筆を持しぬ前ふ石筆めて石版へ片假字を書きしむ
 べし片假字を筆意ありて其形を作るに少くむづり
 片假字を筆意なくとも字形丈を作り得べしよや
 鐵釘の行列ありと思はるゝも讀み得べき文字ハ出来
 るあり○さて又筆を持つ初ハ一の字と十の字とを
 習せし次ぬしとつとを教ふべし此四つの形を自由
 書べき程ぬを夫より片假字を教へ次ぬ數字を授
 け以上段々ハ扁畫多き文字を習へ覺へさすべし

平假字も同字の體幾箇もあり故に常の字体のを教へ
 ありた他の字を讀み得ぬともあるべし左の掲ぐる文
 字丈を教へし書きせむをべし

以強參を牙ハ不魚を去
 里ありぬ不依哉とありとと
 是哉る不依和那とと
 井能か多益は事々ぬ大元
 字阿きはた炎ゆ免と志
 心を氣努以此

王
 合字

右の異體を常の字體を覺へ上めて別々教ふなり但
此體を授くる時をいろは歌の本意めて教ふるを可
とを歌意ふるハ七文字五文字と五列ぬ是を我國の
言葉遣ふ法あり

色を勻へど散ぬるを我が世誰ぞ常あらん
有為の奥山今日越て浅き夢見
片假字ぬを子とネと同字にて井と平とも同ト他を合
字にて一合字のトモキトモノ為の省き
同トうらぬ様の四字あり此外は異体あり
は書くべし

算數

物の數を算ふるを一ニ二ニ三ニ四ニ五ニ六ニ七ニ八ニ九ニ十と教へ又
一つ二つ三つ四つ五つ六つ七つ八つ九つ十と教へ音
訓共ぬ覺へさるべし一ニ二ニ三ニ四ニ五ニ六ニ七ニ八ニ九ニ十と教へ音
イチとヒトツとを同數あり二とフタツとを同ト事あり
リサムとミツとを異あら數ありシとヨツとゴとイツ
、とロクとムツとシチとナ、ツとハチとヤツとクと
コ、ノツとジフとトラと皆別數ぬあはぬとと怨み教
へなくべし○又ヒフミヨイツムナ、ヤコノトと連讀
をも授けあはくべし是もイチニサムと違はぬ數と教へあはくべし

數を取る教方を二法あり其第一法を

左の手の母指を出し他の四指を握りて一と呼び又
一つと呼む一むべ一々次々示指を出し母指と兩合せ
て二と呼び二つと呼む一むべ一々次々其兩指を屈め
て中指薬指小指の三本を開き三三つと呼む一々又
示指を添へて四四つと呼む一々五指悉く伸べて五
五つと呼む一むべ一々其次に右の母指を左の五
指に加へて六と呼び左の示指と中指とを出して七
と呼び薬指を添へて八と呼び小指を足して九と呼
ぶ兩手悉く開けバ十あり

其第二法を

手掌を仰向し先づ母指を屈めて一と呼び示指を
屈めて二と呼び中指ハ三と呼び薬指を四と呼び小
指を屈めて五と呼ぶあり五指共々握り一上と小指
より一本づゝ伸べて六七八九と呼び五指再び開け
バ十と呼ぶあり

此の法を既々覺へ一上を多き數を取るを教ふべし
即第二法に因り右の手にて一度屈伸して十と呼べ
む左の母指を屈め二度屈伸をせむ二十と呼びて左
の示指を屈め三度目を三十して中指を屈め四度目

と薬指^{クネリ}めて四十^レと一^ゴ五度目^{ドメ}も小指^{コサビ}めて五十^ゴとと六^ロ度目^{ドメ}よりと屈^カめ一^{イチ}小指^{コサビ}より一度^{イチ}め一本^{イチ}づ、伸^{ノビ}一^{イチ}十^{ジュ}度目^{トメ}も百^{ヒャク}めて五指^{ゴササ}全く開^{ヒラ}くあり

數^{スウ}を一^{イチ}十^{ジュ}百^{ヒャク}千^{セン}万^{マン}を大^{ダイ}數^{スウ}と定め小^コ數^{スウ}と十二^{ジュニ}十三^{ジュサン}十四^{ジュシ}十五^{ジュゴ}十六^{ジュロク}十七^{ジュシチ}十八^{ジュハチ}十九^{ジュキュウ}、百^{ヒャク}二百^{ニヒャク}三百^{サンヒャク}四百^{ヨウヒャク}五百^{ゴヒャク}六百^{ロクヒャク}七百^{シチヒャク}八百^{ハチヒャク}九百^{キュウヒャク}、千^{セン}二千^{ニセン}三千^{サンセン}四千^{ヨウセン}五千^{ゴセン}六千^{ロクセン}七千^{シチセン}八千^{ハチセン}九千^{キュウセン}、万^{マン}ありきて万^{マン}ハ常^{ジョウ}數^{スウ}の極^{キョク}あるを十^{ジュ}万^{マン}百^{ヒャク}万^{マン}千^{セン}万^{マン}と數^カへて万^{マン}を億^{オウ}とともあり總^{スベテ}て一^{イチ}十^{ジュ}百^{ヒャク}千^{セン}万^{マン}の五^ゴめて一局^{イチキョク}と一^{イチ}万^{マン}十^{ジュ}万^{マン}百^{ヒャク}万^{マン}千^{セン}万^{マン}億^{オウ}と又^{マタ}五^ゴめて一局^{イチキョク}とと

加減乗除

加^カ減^{ゲン}乗^{ジョウ}除^{ヂョ}ハ算^{サン}の用^{ヨウ}ありて如何^{イカニ}も入^{イル}組^{クミ}たる算^{サン}用^{ヨウ}ありて此^{コノ}四^シ術^{ジュツ}の外^{ホカ}ありあらむ○加^カ算^{サン}を増^マ一^{イチ}加^カふる算^{サン}めて寄^キ算^{サン}差^サ算^{サン}是^シあり○減^{ゲン}算^{サン}ハ在^{アル}る數^{スウ}を引^{ヒキ}き減^{ゲン}らる算^{サン}めて寄^キ算^{サン}是^シあり○乘^{ジョウ}算^{サン}ハ在^{アル}る數^{スウ}の上^{ウヘ}に他の^{ホノ}數^{スウ}を乗^{ノゾク}せ掛^カけて其^{ソノ}數^{スウ}を増^マさしむ掛^カ算^{サン}是^シあり○除^{ヂョ}算^{サン}ハ折^{セツ}除^{ヂョ}と云^{イハ}ひて在^{アル}る數^{スウ}を割^ワり幾^{いく}箇^こも分^{ワケ}つ割^{ワリ}算^{サン}是^シあり九^ク九^クとを數^{スウ}の呼^{ヨビ}聲^{コエ}めて寄^キ算^{サン}引^{ヒキ}算^{サン}掛^カ算^{サン}割^{ワリ}算^{サン}共^ニ其^{ソノ}呼^{ヨビ}聲^{コエ}あり○總^{スベテ}て算^{サン}數^{スウ}の法^{ホウ}を一^{イチ}より九^ク止^{トメ}る十^{ジュ}と又一^{イチ}返^{カエ}るあり故^{ユヘ}に九^ク九^クを數^{スウ}の終^{ハジメ}とと○又^{マタ}一の^{イチ}前^{マヘ}に零^{レイ}點^{テン}を置^{オケ}きて是^{コノ}を數^{スウ}の初^{ハジメ}ととるあり

加算九九

一ニ九足シテ十
 二ニ八足シテ十
 三ニ七足シテ十
 四ニ六足シテ十
 五ニ五足シテ十
 六ニ四足シテ十
 七ニ三足シテ十
 八ニ二足シテ十
 九ニ一足シテ十

一つも九つを加ふを十とある
 二つも八つを加ふを十とある
 三より以下も同ト理みて三も七
 を加ふを十とあり四も六を加
 ふを十とあり五も五を十とあり
 六より九までを一より四までと
 裏返り行くあり
 此九九を多くの數を寄せ合はる
 時は必用あり

減算九九

一引キテ九殘ル
 二引キテ八殘ル
 三引キテ七殘ル
 四引キテ六殘ル
 五引キテ五殘ル
 六引キテ四殘ル
 七引キテ三殘ル
 八引キテ二殘ル
 九引キテ一殘ル

十ある中より一つ引き減らせむ
 跡は九つ殘るあり又二つ減らせ
 むハつ殘り三つ引けむ七つ殘る
 四も五を六のこり五も五を六の
 五とある惣で前の加算と反對に
 行く者あり
 此九九を原數より引き去りて減
 る時必用あり

乗算九

一ガ一	一ニガ二	一三ガ三	一四ガ四	一五ガ五
一六ガ六	一七ガ七	一八ガ八	一九ガ九	二二ガ四
二三ガ六	二四ガ八	二五ガ十	二六ガ十二	二七ガ十四
二八ガ十六	二九ガ十八	三三ガ九	三四ガ十二	三五ガ十五
三六ガ十八	三七ガ廿一	三八ガ廿四	三九ガ廿七	四四ガ十六
四五ガ二十	四六ガ廿四	四七ガ廿八	四八ガ卅二	四九ガ卅六
五五ガ廿五	五六ガ三十	五七ガ卅五	五八ガ四十	五九ガ四十五
六六ガ卅六	六七ガ四十二	六八ガ四十八	六九ガ五十四	七七ガ四十九
七五ガ五十六	七九ガ六十三	八八ガ六十四	八九ガ七十二	九九ガ八十一

此乗算を在る數に又數を乗せ懸けて幾箇とあると
 を早く知る法ありまづ一を一を懸くをむ一あり二
 を掛くをむ二あり一を一より九まで掛るも其數を
 を増さざるなり二より九を掛る毎に其數増せり二は
 二を乗ぜむを二ニガ四と呼びて其數四とあり三を
 懸る時を二三ガ六と呼びて六とあるあり二を二つ
 合せ二を三つ合せたる者と同一是より多き乗數と
 ありて九々八十一に至るまで皆同理あり
 此九々の呼聲をよくよく記憶して平生より口誦
 せせおき少しも滞りのあき様は覺へさすべし

除算九九

二添作五	二進	三三三十一	三三六十二	三進	三十一
四二二七二	四二添作五	四三七十二	四進	四一十	五一加一
五二加二	五三加三	五四加四	五進	五一十	六一加下四
六三十三二	六三添作五	六四六十四	六五八十二	六進	六一十
七二加下三	七二加下六	七三四十二	七四五十五	七五七十一	
七六八十四	七進	八一加下二	八二加下四	八三加下六	
八四添作五	八五六十二	八六七十四	八七八十六	八進	八一十
九一加下	九二加下二	九三加下三	九四加下四	九五加下五	
九六加下六	九七加下七	九八加下八	九進	九一十	

此除算を二より九まであまを八算と名く又二を一段と云ひ三を二段と云ふ以下四段五段六段七段八段九段と云ふあり○二段の割聲を二つ三段を三つ四段を四つ五段を五つゆて九段まで同ト理あり

二を二つは割る時と一とあり三を三つは割る時と一とある故に二進一十三進一十と呼びて一とあるあり四五六七八九共ト同ト○添作五と呼ぶハ必二段四段六段八段の丁數に限るあり一を二つは割る此一を十とせむハ其半分を五あり二を四は割るも三を六は割るも四を八は割るも皆五あり○加一加

二と呼ぶを五段のみめて其處に在る數を倍さへ
をせバ五つは割むなる者あり○此他の法を割る丈
の數を其處に擧げて其割餘る數を殘を法あり一を
三は割ると三づゝ三つめて一つを殘るあり故に三
一三十一と呼び三を擧げて一を次へ送る三二六十
二も四三七十七二も六二三十二なども同し理めて割
る丈の一箇を其處に置きて割殘りを次へ送るあり
此ハ算ハ算盤に就きて學ぶべしあゝを只割聲の心
得丈を概略に云ふあり

明治十七年五月卅一日版權免許
同 年十月七日出版

著述人

東京府平民

大槻修二

淺草區北富坂町廿五番地

出版人

今

北澤伊八

同區茅町貳丁目五番地

○諸國弘賣書肆

羽前山形	同所	同所	同所	同所	同幸手	同岩槻	同越谷	同本庄	同熊谷	同所	同所	武州浦和
五十嵐太右衛門	二上吉藏	大黒屋佐兵衛	蜷川國藏	菅間定次郎	大里利平	多々屋作左衛門	龜屋利助	酢屋安平	杉浦平左衛門	中村朝次郎	博聞分社	須原屋支店
同六日町	同地藏堂	同三条	同所	同水原	同葛塚	同所	同所	越後長岡	同上田	信州長野	陸中土沢	羽前谷地
目黒宗内	伊丹屋藤吉	樋口屋小左衛門	西村鉄次郎	西村六平	弦卷七十四郎	松田周平	上田屋治平	目黒十郎	鼠屋甲造	西澤喜太郎	大澤屋利兵衛	田宮五郎